

さまざまな話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	610-620
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001826



さ
ま
ざ
ま
な
話

273 タットハンとムバムバモ

この話はこのようだ。人びとはこの世にヘビがいたという。そのヘビの名前は、タットハンという。タットハンはこの世も、空も七重にまいていた。ヘビは天も地も一匹で七重にまいていた。ヘビは、「そういうことで、アツラーは、わたしにまさるヘビをおつくりにはならなかった」といった。ヘビは自分のことを自慢した。もう一匹のヘビをムバムバモという。タットハンとムバムバモはであったことがなかった。タットハンとムバムバモはおたがいのことをきいているだけだった。どちらも、どちらがまさっているか知らなかった。ムバムバモは天使たちといっしょにいた。

さて、ムバムバモは食べ物をつたべて、よこになって、ねた。タットハンはこの世にいるすべてのヘビにまさっているとおもっていた。

さて、タットハンはおきあがり、あつちこつちをうろついでいる。ムバムバモは、ねている。

さて、タットハンがムバムバモの鼻のところをやつてきて、そのなかにはいって、こちらからでていった。ムバムバモはねていて、目をさまさなかった。ムバムバモは目をさますと、ムバムバモのそばにいた天使たちが、「タットハンがやってきて、おまえさんの鼻をとおりぬけて、そこにでたが、おまえさんは目をさまさな

かった」といった。ムバムバモは、「おおきいというと、タットハンといわれるぐらいなのに、わたしがそれを感じなかったというのか」といった。天使は、「そうだ」といった。ムバムバモは、「それでは、アツラーがわたしたちのようなものをほかにおつくりにならなかったということだ。この世で、わたしにまさるものをおつくりにならなかつたので、そのようなものはいない」といった。ムバムバモは自慢した。ムバムバモはおきあがり、いつてしまった。喉がかわいたので、池に水をのみにいった。その池の名前はバイブールという。ムバムバモはいつて、水をのんでいる。その池からカエルがでてきて、ムバムバモをのみこんでしまい、ムバムバモをのみこんだまま池にはいった。そのカエルの名前はわかっている。カエルがムバムバモをのみこんだまま池にはいると、池は自慢して、「そういうことなら、わたしのようなのは、ほかにいない。アツラーがおつくりになつたもので、ムバムバモほどのものはいないのに、ムバムバモがやってきて、わたしのなかにはいり、水をのもうとした。そこにカエルがやってきて、ムバムバモをのみこみ、わたしのなかにはいって、そこにいる。それならば、わたしほどのものはほかにいないということになる」という。池も自慢をしたわけだ。カエルも、ヘビもおおきいのに、それが自分のなかにはいりからだ。

さて、主は天使をくだされた。主は天使に、「いつて、おまえの

頭をぬらして、きなさい、おまえの髪の毛をそってやる」といった。天使が池にやってきて、頭の片側をぬらすと、水がなくなってしまう。頭全体はぬれなかった。それで、天使も自慢して、「パイプベルの池にわたしがやってきて、わたしの頭をぬらしたが、じゅうぶんぬらせないうちに、水がなくなってしまう」といった。天使は自分ほどのものはいないといった。

さて、主はべつの天使をおくられた。この天使がやってきて、さきにやってきた天使に唾をはきかけた。さきにやってきた天使は七十年のあいだ、その唾のなかをあるいたが、唾はなくならず、そのなかからでてこなかった。

わたしはこのように、この話をきいた。
わたしは、おしまい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 アーマドゥ・モーディッポ、ケイニ村にて。この話はこの村の礼拝のときをつげるヤージからきいたという。ヤージはこの話を東にある地方できいた)

274 細足とおちよほ口と大腹と腰細

ちいさなお話、ちいさなお話。さて、はやくやいなさい。おまえさんの頭のうえに、穴のあいたおおきな半截ヒョウタン、パシン。きいているな。

細足とおちよほ口と大腹と腰細が、野原にキシメニアの実をとりに行った。

さて、細足とおちよほ口と大腹と腰細がどんなあるいていくと、おおきな川があった。さて、細足とおちよほ口と大腹と腰細はいっしょに水にはいつていき、やすんだ。細足とおちよほ口と大腹と腰細はたちあがり、でかけていった。細足とおちよほ口と大腹と腰細がいくと、キシメニアの木があった。キシメニアの木があったので、細足とおちよほ口と大腹と腰細は、「だれが木にのぼって、実をとってくれるのか」といった。大腹が自分のほるといった。大腹がキシメニアの木をつかまえ、のぼっていくが、お腹がやぶれてしまった。大腹がおちて、死んでしまった。残りのものが、「だれが、このことを村にいいにくのか。ほら、だれが大声をあげるのか」といった。おちよほ口が、「わたしが大声をあげる」といった。おちよほ口がキリウリウリと叫び声をあげると、口がさけてしまった。おちよほ口もおれて、死んでしまった。残りのものが、「だれがはしって、村にいき、このことをいうのか」といった。

さて、細足が、「わたしは村にいつて、このことをいう」といった。細足があるきはじめると、足がおれてしまった。細足はそこでたおれて、死んでしまった。腰細のジガバチが、「わたしは腰に帯をしめて、死体をうめる」といった。腰細が死体をうめようとする時、腰がつぶれてしまったとき。

お話しはおしまい。ウサギの蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 バーセーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマーン、マルアにて)

275 人をくう人たち

娘が学校にいつている。すなわち、学校にいく道にイスラム教の先生がいる。ほんとうのこと、このイスラム教の先生は人をくう。

さて、このイスラム教の先生も、そのむこさんも人をくう。すなわち、このイスラム教の先生は、老女だった。わかるかな。

さて、娘の兄さんが娘に、「イスラム教の先生のところにいこう。きょう、あの人がなにをいうかきいてみよう。つまり、あの人は手相をみて、これからこの世でおまえになにがおこるかということ、いままでおまえにおこったことをいってくれるだろう」といった。

さて、先生は娘の手相をみると、「おまえさんはちかちか死ぬだろう。家にかえったら、おまえさんは死ぬだろう」といった。ほんとうのこと、この先生はやってきて、この娘の魂をぬきとってしまおうとしていた。

さて、娘は、「よろしい」といって、家にかえっていった。
さて、家にかえると、頭がいたくなった。娘は体のどこもいたま

ないが、頭がいたいといった。

さて、娘は家にかえると、頭がいたくなりはじめた。

さて、娘はなにもいわなかった。ずっと、だまっていた。ずっと、だまっとままま、なにもいわなかった。娘がすこしよこになる

と、頭がいたくなりはじめた。頭はずっといたんだままだ。

さて、娘は死んでしまった。娘が死ぬと、人びとは娘を埋葬したではないか。じつは、夜、イスラム教の先生である老女はそこにいき、娘をほりだした。老女は娘をほりだすと、ある家にもつていった。その家に娘をもつていくと、そこには、術では老女にまさる人がいた。

さて、老女は娘を医者や屋敷にもつていった。医者は術をつかって、人をいやす。この医者は黒人のもつ知識では、この世で、だれにもまけなかった。

さて、老女たちは娘をつれていった。娘をつれていくと、娘をよこにした。医者がみると、娘は息をしている。でも、そこには死人がよこたわっているようにみえる。人びとは医者に、「この人はいきかえるかい。この人はあの人たちの娘なのだ。あの人たちは気がふれてしまった。娘が死んだので、家族のものは財産をいくらかつても、娘をいきかえらせなかった」といった。

さて、医者たちは、「よろしい」といった。医者は一生懸命になつて、みている。医者たちは娘の様子をみている。ほんとうのこ

と、娘は人をくうことのできる力をもらっていた。夜になると、娘の魂はおきあがり、あっちこっちをうろつき、人をくって、もどつてくる。

さて、人をくってもどつてくるのだが、ほんとうのこと、人をくう人たちがでかけていった村には三人の人をくう人たちがいる。娘は四人目なのだった。

さて、人びとがおきあがり、「きつと、この村に人をくう人たちがはいった。ねているあいだに、人が死ぬのはどうしようもない」といった。

さて、人びとは村の支配者をよびよせた。ほんとうのこと、この村の裁判官と王さまはどちらも人をくう人だった。もう一人はただれだったかな。わたしはわすれた。もう一人は老人で、みんなで、三人になる。この人たちは人をたべる。

さて、人をつかまえる人をくう人たちの王さまがこの村にやってきていた。

さて、人びとは、「きょうこそ、その人をたべる人をはつきりさせないといけない。人をくう人たちはわしらにたいへんな迷惑をかけている」といった。

さて、人びとは水をもってきた。人びとは術をつかった。

さて、裁判官も、王さまもそこにいた。わかるかな、この二人はどうしても、そこにいなければならなかった。この人たちがそこに

いるとき、裁判官の魂も、王さまの魂も、老人の魂も、娘の魂もでいった。人びとはひよつとしたら、娘も人をくう人でないかと話をしていく。そんなことだれにわかるか。娘がよこになっているとき、人をくう人たちがやってきて、この人たちがうたがっていたとおり、その魂をとってしまっていた。

さて、人びとは人をくう人たちの魂をとり、それをころしてしまった。水面にみえる魂をころしてしまうと（水を容器にいれ、その水の表面にうつる人の姿に術をつかってころせると信じられている）、裁判官が死んでしまった。王さまも、死んでしまった。老人も、死んでしまった。こうして、人びとはこの地方の人をくう人たちをとりぞいだではないか。

さて、人びとが娘の魂もころしてしまおうとしたところ、娘はたおれて、うごく、腹をおさえた。ほんとうのこと、術のための薬をつかう人たちのところでは、薬を夜につくる。人びとは娘を薬のはいった水で体をあらおうとしたとき、娘は、腹から、「ああ」という声をだした。娘はよこになって、背筋をのばすと、腹をおさえた。

さて、人びとは術をつかうえらい人のところに行ってきた。人びとは術をつかう人に、「きょう、こういうことがおこった。おまえさんのところにいる娘も、人をくう人だ」といった。術をつかう人は、「なんだって」といった。人びとは、「ほんとうだ。こういうこ

とだ」といった。

さて、人びとはたずねた。

さて、人びとは水面にあらわれた娘の魂を打った。人びとがこれから魂をころしてしまおうといったとき、娘はうごきだし、腹をおさえた。そうしているうちに、水面にあらわれた魂はきえてしまった。人びとは娘の魂をつかまえられなかった。

さて、術をつかう人が、「なんと」といった。

さて、術をつかう人たちは人びとに、どうなったのかたずねた。

人びとは、「娘はこういった」といった。

さて、人びとは、「真夜中、何時ごろ、娘は腹をおさえた。でも、だれにもわからない」といった。

さて、人びとは、「その娘ではないのでは」といった。

さて、老女はやってきて、娘をみる。

さて、老女がやってきた。人びとは老女をつかまえた。人びとは老女に娘をはきだし、娘の人をくう力をぬいてしまうようにといった。老女は自分がたべていた娘をはきだした。老女は娘にまえとおなじように正気をとりもどさせた。老女がやってくると、人びとは老女をつかまえて、しばってしまった。人びとは老女に娘をはきだし、自分のとった魂をかえせといった。

さて、わかるかな、娘はよこになつてゐる。

さて、人びとは老女をつかまえた。老女はなにもしらないといっ

た。人びとは老女をつかまえた。老女はころされるとおもった。

さて、老女は、「まちなさい」といった。人びとは老女と老女の夫のところに行った。老女は、「わたしはこういうことになっていく。この人たちにころされないように」といった。

さて、老女の夫は、「わかった」といった。老女の夫も人をくうたいへんな力があつたので、人があらわれると、相手が人をくうかどうかわかってしまう。老女の夫は昼間はうるつかず、夜になるとうるつく。

さて、老女とその夫はやってくると、娘に魂をかえした。娘は魂をかえしてもらうと、おきあがって、「わたしはどこにいる」といった。人びとは、「こういうことで、おまえさんはこういうところにいる」といった。人びとは話をしない。人びとは娘をながめた。

さて、老女は娘の魂をとったところをいう。人びとは娘になにもいっていない。娘は、「わたしはどうしてここにいるの」といった。娘は魂をとりましたので、まえとおなじようになった。人びとは娘をつれてかえっていった。

さて、人びとは学校の人たちにいった。学校の人たちに、「おねがいだ。おまえさんたちが、あの娘にあつても、あの娘が死んでいないことをはなさないように。あの娘は死んでいなかった。あの娘にはこういうことがおこつたのだ」といった。人びとは娘の友だちたちにそういった。

さて、娘は自分の小屋にかえってきた。娘はなにがおこったのかといった。自分は学校にいった、勉強していたのに、いったいどうなったのかといった。きょう、娘はいそいでおり、自分のような子どもたちにさきがあるかせないようしていた。ほんとうのこと、娘は死んでいた。人びとは娘を埋葬しにいった。人びとはそれをしていった。(しかし、そのあと娘はいきかえったのだった。)

さて、人びとは娘を自分たちの村につれてかえってきた。こうして、娘は父親と母親のいるところで、なんでも、まえとおなじようにしたとき。

お話は、みじかい。おしまい。

(一九八三年一月二五日、語り手 キンギ・アイサトウ、ガウン デレにて。この話は子どものころ老女からきいたという)

276 四人の馬鹿

ちいさなお話、ちいさなお話。さて、はやくやりなさい。聞き手の頭のうえに、穴のあいたおおきな半截ヒョウタン、パシン。わかるかな。

三人の馬鹿がいた。まえには、四人いたが、一人はよめさんをつれて町にうつっていき、そのあとに三人をのこした。

さて、三人はいつもいっしょだった。三人は町にいる人のところ

にいくことになった。三人は、「おまえさんは、フルベ族ではない。それなのに、フルフルデ語ができればという。アツラーがどうして、おまえさんがフルフルデ語ができるのかどうかおしえてくださるように」といった。

さて、三人はそこにいた。三人は、「わしらはここにいます。わしらはアツラーがなさることを信じている。わしらはわしらの酒をのみ。わしらはわしらのブタをくう。(イスラム教とはブタをたべないし、酒ものまない。)おまえはフルフルデ語がわかるという。おまえさんは、フルベ族のなかにすんでいるので、おまえさんはフルフルデ語ができるという。いつも、おまえさんは水をくんできて、おまえさん(原文では「あいつら」になっている。フルフルデ語ができないためとかがえられる)のペニスをあろう」といった。

さて、三人はすわって、食べ物をたべている。その日、雨がふった。

さて、カエルが三人のところにむかって、とんでくる。カエルがちかづいてくると、一人が、「あつ、ガエルだ」といった。もう一人は、「それはガエルではない。ピョンピョンというのだ」といった。もう一人は、「それは、『はねて、足をなげる』ではないか」といった。

さて、三人はいいあらそった。三人は、「それでは町にすむわしらの仲間のところについて、あいつにたずねよう」といった。三人

は、「よろしい。いついくのか」といった。三人は、「夜にいく。夜にいく。夜にいく」といった。夜、十時くらいになると、三人はたちあがり、町にいった。すこしくらかった。三人は仲間のところについた。一人は、「平安、なんじらにあれ（サラーム・アレイクム）」と挨拶をした。

さて、町にうつりすんでいる男のよめさんは、「なんじらに、平安あれ（アレイクム・サラーム）」と挨拶をしなければならぬのに、「そこにいるカラスよ（レークワル・ドー）」という。すぐに、男のよめさんがでてきて、「真夜中、おまえさんたちはどうしたのか（コ・ワッデイ・オン・チャカ・ジェンマ）」といわなければならぬのに、「おまえさんたちは、どうして、このひろい野原の苦労のなかにやってきたのか（コ・ワッデイ・オン・エ・ターキ・ヤイレ・ドー）」といった。

さて、三人のうち、一人が女にこたえて、「わしらは、いいあらそった」という。すなわち、「わしらは、いいあらそった（ミン・ガーボーティリ）」といわなければならないのに、「そうなのだ。こいつは、『ガエル』といった。こいつは、『ピョンピョン』という。こいつは、『はねて、足をなげる』といった。いったいそれは、『はねて、足をなげる』なのか、それとも、『ガエル』、それとも、『ピョンピョン』なのか」という。町にきている男が、「なんだって、それは、『ガエル』というのだ」という。三人のうちの一人が、「お

まえさんは（フルベ族というべきところ）プルディ族のところにきているのに、おまえさんは（フルフルデ語というべきところ）プルディ語を知らないとはどういうことか」という。

（一九七〇年二月二十四日、語り手 バーセーウオ村出身のアップド ウツラーイ・ウスマース、マルアにて）

277 ダラムトゥムとバラムトゥム

ちいさなお話、ちいさなお話。さて、はやくやりなさい。おまえさんの頭のうえに、穴のあいたおおきな半載ヒョウタン、パシン。わかるな。

さて、ダラムトゥムがバラムトゥムに、「野原にいけ。獲物をさがして、もってこい」という。バラムトゥムは野原にいった。バラムトゥムがでかけていくと、ウワバミがねていた。そのそばにおおきな川があった。バラムトゥムがいくと、ウワバミが高みでねていた。バラムトゥムは屋敷にもどっていき、よめさんに、「籠をもつてこい、いこう。獲物が手にはいった」といった。ダラムトゥムはオノと籠をもつた。二人とも馬鹿だった。

さて、二人はウワバミのところについた。さつそく、むこさんのバラムトゥムは、よめさんのダラムトゥムに、「ぶつぎりにするか。きるのか」という。

さて、ダラムトゥムはバラムトゥムに、「なにをいつているの、バラムトゥムよ、手で臓物をあつめて、籠にいれなさい」という。バラムトゥムはウワバミの尻の穴に手をもつていき、臓物をとろうとする。尻の穴がしまつてしまい、ウワバミはバラムトゥムをひっぱっていく。

さて、バラムトゥムはダラムトゥムに、「ダラムトゥムよ、モロゴシの茎をとり、ヘビを高めにもつていけ。モロゴシの茎をとり、高みにおつていけ」という。すなわち、バラムトゥムはダラムトゥムにモロゴシの茎をとり、ウワバミを高みのほうにいかせるといつているのだ。

さて、ウワバミが川にちかづき、川にはいるうとする。バラムトゥムはダラムトゥムに、「死ぬのか、それとも、ながれるのか」といつたとさ。

(一九六九—七〇年、語り手 バーサーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマース、マルアにて)

278 ジャムナイとワントウミ

ちいさなお話、ちいさなお話。

さて、ジャムナイとワントウミがいた。二人は、「さて、みてみる。その雄ウシに寄生虫がついている。どうしたものか」という。

ほんとうのこと、ワントウミがすわつていて、スポンがやぶれてる。スポンのやぶれたところから、キンタマがみえている。キンタマに寄生虫がついている。

さて、ジャムナイがみた。ワントウミはウシについている寄生虫をみて、それをとつてしまおうとしている。ジャムナイはワントウミについている寄生虫をみている。

さて、ジャムナイは、「なんだって、友よ、おまえさんのキンタマにながついているのか」といつた。ワントウミがみてみると、ウシにつく寄生虫が自分のキンタマについていた。ジャムナイは、「よろしい、ウシの寄生虫をとりおわたたら、おまえさんの寄生虫をとつてやる」といつた。ワントウミは、「よろしい、そうしよう」といつた。二人はウシについている寄生虫をとりおえた。ジャムナイはワントウミをうわむけにねかせた。二人はワントウミの寄生虫をとろうとする。

さて、ワントウミはやわらかいウンコをし、自分とジャムナイの手にウンコをつけた。ジャムナイは、「なんだって、友よ、おまえさんはなにをするのか。寄生虫をとつてやろうとしているのにおまえさんはわたしの手にウンコをしてくれだ。それはよいことか」といつた。

さて、ジャムナイが一生懸命になつてゐるのに、ワントウミはウンコをし、自分とジャムナイの手にウンコをつける。そのうち

に、二人はワントウミのキンタマについている寄生虫をみんなとつてしまった。

さて、二人は村にかえっていったとき。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ・サイドウ・ムーサ、レイ・プーバにて。イーサはレイ・プーバ地方のダーマ族である)

279 ラートの兄さんのジョッカデイ

ちいさなお話、ちいさなお話。(聞き手は、「話し手はお尻は火のようにあかく、切り株にすわっている」と相槌をうつという。)

ある人が、「ラートの兄さんのジョッカデイは、杖でわたしの首をたたいた。ジョッカデイはわたしの膝に湯をたらした。ジョッカデイはわたしに、『ああ、この杖は、わるい』といった」という。ジョッカデイは、その人に、「さて、もう一度したにむいてよこたわりなさい」といった。ジョッカデイはその人の腰をふみつけて、「ちゃんとよこになれ。わかるかな。おさえるというから、わたしはおまえさんをおさえる」といった。ジョッカデイはいくと、その人の腰をおさえた。

さて、その人はそこを駄目にしてしまった。その人はウンコをしってしまった。ほかにそれほど駄目なことがあるか。その人はおさえ

ろという。ジョッカデイはその人をすこしずつおさえている。おさえてもらって、その人は、おさえてもらうことは、口にいれる砂糖のようによいといった。

さて、その人はしらないうちにウンコをだしていたとき。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ・サイドウ・ムーサ、レイ・プーバにて。この話は、ドウル族のアイサトウ・ダル・ジャブ・ワイルからきいたという。イーサはレイ・プーバ地方のダーマ族である)

280 フランス人と守衛

フランス人と守衛の話。

あるフランス人がやってきた。フランス人は役所にやってきた。フランス人はどうしようもないほど、人にものをやる。子どもたちにお金をくれる。お金をくれる。

さて、守衛が、「フランス人よ、おまえさんは馬鹿だ。そんなに人にものをやるな」といった。

さて、フランス人はそのままそこにいた。しばらくときがたった。

さて、ある子どもがやってきて、「フランス人よ、なにかおくれ」という。フランス人は、「わたしはおまえさんにはやらない。この

ようにして、迷惑をかけるのか。気のふれたものよ。おまえさんはわたしたちに迷惑をかけるとは、どうしたことか。おまえさんは、わたしをしっているのか」という。

さて、しばらくして、フランス人たちがやってきた。フランス人たちは車につて、でかけていく。ある子どもがやってきて、車にしがみついた。守衛はその子どもをなぐった。守衛がなぐったので、子どもは車からおりた。車からおりると、人びとは、「おまえさんはだれの子か」といった。守衛は、「おまえさんは、だれの子か」といった。子どもは、「ぼくは、ジンギ・ニヤーマ・サーラの子だ」といった。守衛が、「おまえさんの町内はどこか」という。子どもは、「ぼくの町内はワウトールジだ」という。守衛が、「おまえさんの町内はどこにあるのか」という。子どもは、「ガウンデレにある」という。守衛が、「友よ、友よ、おまえさんの目がはれているのはなぜか」といった。子どもは、「へビのおかげだ」という。守衛が、「へビがどうした」という。子どもは、「へビにかまれたのだ。へビにかまれた。へビにかまれた。あかい口をもつていた」という。

さて、守衛は、「ハゲー・スクト・ハリーム・タンブル（意味不詳）」などといった。

さて、フランス人がやってきた。守衛はフランス人に、「スクト（意味不詳）」などといった。

さて、フランス人はすわった。フランス人は、「おまえさんの目はどうしたのか」という。子どもは、「ぼくはガウンデレにいくところだった。ぼくはバオバブの葉をとりに行った。そこで、へビにかまれた。へビにかまれた。そのあと、目がはれた。かえってくる、食事がおわっていて、食べ物がみんななくなっていた」といった。

さて、子どもはすわった。フランス人たちがやってきた。フランス人たちはその子どもに食べ物とお金をやった。

さて、守衛は子どもについていった。子どもは家にかえつていったとき。

わたしがお話をしたのではない。切り株が話をした。わたしはそれをきいたのだ。

(一九八一年二月一六日、語り手 スレイ・ルーティ・ジャツボ
ナ・ペーテル・ゴナ・ニリー・ディンバ・ゲルネ・ハム・ガー
ブド、レイ・ブーバにて。この話は、一九八一年二月一五日に
父方のおじ、ジョーボから、役所のある町内できいたという)

281 落花生畑をもっている人

ある男が落花生畑をつくり、落花生を屋敷にもつてかえた。

さて、友だちがやってきた。男は、「わたしは落花生のついた莖

を七本おいておく。すぐにかえってくる。おまえさんがそれをぬすんでも、わたしにはわかる」といった。

さて、友だちはその莖を六本ぬすみ、男に一本だけおいておいた。男がかえつてくると、六本がなかった。男は、「よろしい。あの人にであえばよい」といった。男と友だちは道であつた。男は、「おまえさんはだれから落花生をぬすんだのか」といった。男は友だちを平手打ちにした。男は、「おまえさんはだれから落花生をぬすんだのか」といった。男は友だちを平手打ちにした。友だちはにげていった。友だちは、「わたしがぬすんだ。わたしがぬすんだ」という。二人がであうと、男はまたしても、友だちに平手打ちをくらわした。

さて、友だちは、「わたしがぬすんだ」といったとき。

お話は、おしまい。

(一九六五年頃、語り手 マーヨ・ルウエの子ども、マーヨ・ルウエにて)

282 目のみえない人と耳のきこえない人

二人の人がいた。一人は目がみえなかった。目のみえない人は人の屋敷にはいって、盗みをするといつた。もう一人は耳がきこえなかった。耳がきこえない人は旅にでかけていき、自分のよめさんを

家へのこした。自分のよめさんを家へのこしていたが、男は夜に家にかえつてきた。男は自分のよめさんの小屋にやってくると、小屋にもたれ、小屋のなかで話しているのをきこうとする。目のみえない人はだれかの家について盗みをするといふ。この人が人にみつかつたらどうなるのか。どうしてにげるのか。それに耳のきこえない人が、夜にかえつてきたといふ。家にかえつてくると、小屋の壁にもたれ、小屋のなかの話をきくといふ。この二人のうちどちらが、よりあほらしいか。

(一九六六年、語り手 ガルアの非フルベ族、ガルアにて)